山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第53号（2022. 3）

中国の義務教育段階の美術教育における創造性の開発について

福田　隆眞[＊1]・楊　世偉[＊2]

Creativity of art education in China

FUKUDA Takamasa[＊1], YOU Sei[＊2]
（Received December 15, 2021）

キーワード：中国、美術教育、創造性、義務教育、課程標準

はじめに

中国の義務教育段階は、学校教育の中で美術教育が最も集中している段階である。幼稚園のように芸術教育をより広く捉えている指導綱要に比べて、小中学校の美術課程標準はより明確な指導方針を有している。また創造性の育成に対する要求と方法の説明も詳しくなっている。

しかし、教師の資質能力が不均衡であり、各地域の教材が異なっているなどの理由で、美術教育は地域により違いが大きい状況にある。そこで、ある地域の美術教育を限定して分析するだけでは、現在の中国の美術教育の状況を把握することはできない。したがって、本稿では主に現在の美術課程標準の解読及び創造性教育に関する文献の分析を通して、現在の中国の義務教育段階における美術教育について、創造性教育の理論的方法をマクロ的視点から述べる。更に、江蘇省の美術教科書を一つの例として、現実の教育内容を説明する。

まず、『義務教育美術課程標準（2011年版）』（以下は『美術課程標準』と略称）の概要を述べて、義務教育段階の美術教育における創造性教育に対する理念や方針を明らかにする。また、『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』（以下は『美術課程標準（解読）』と略称）に基づいて創造性の育成に関する部分を抽出して、説明する。そして、創造性の研究に関連する研究者の課程標準に対する論文と文献に基づいて、創造性の育成方法に対する既存の研究結果や観点を述べ、現在の中国美術教育における創造性の育成の理論、方法及び今後の発展方向を考察する。

１．『義務教育美術課程標準（2011年版）』における創造性教育に対する理念や方針

現行の『美術課程標準』では、義務教育段階の美術課程の価値と基本理念では特に「創造性」と言う言葉を使用していないが、「革新精神」と言う言葉がよく見られる。これについては以下のように解説をしている。

「現代社会は一人一人の主体性と創造性を十分に発揮する必要がある。そのため、美術の授業は特に児童生徒の個性と革新精神の育成を重視して、多種の方法を使って、創意を具体的な成果に転化することを助ける。総合的な学習と探究的な学習を通じて、児童生徒を具体的な状況の中で探究と発見を導き、異なる知識の関連を見つけさせる。さらに児童生徒の総合的な実践能力を発展させ、創造的に問題を解決するように導く。」[1)] 創造性の育成は義務教育段階における美術教育の価値と基本理念において重要な一部であるとも言える。

また、美術教育の目標には「知識と技能」、「過程と方法」、「感情、態度と価値観」という三つの視点が含まれている。また、現行の『美術課程標準』では、美術教育の内容を「造形、表現」、「デザイン、応用」、「鑑賞、評論」、「総合、探求」の四つの分野に分けている。従って、教育の内容によりその目標は

＊1　山口大学名誉教授　＊2　中国南京正行教育児童美術教員

異なっている。創造性の育成に関する目標は「造形、表現」、「デザイン、応用」、「総合、探求」の三つの分野に含まれている。これらを整理すると表１になる。表１では「知識と技能」、「過程と方法」、「感情、態度と価値観」の三つの視点でそれぞれ三つの分野の目標を述べている。

表 1　教育目標と内容

		教育の目標		
		知識と技能	過程と方法	感情、態度と価値観
教育の内容	造形、表現	線、形、色、空間、明暗、材質感などの基本的な造形要素を観察、認識、理解する。対称、均衡、重複、リズム、対比、変化、統一などの方法を使って造形活動を行い、想像力と創造意識を高める。	各種の美術媒介、技巧と制作過程の探求と実験を通じて、芸術の感知能力と造形表現能力を発展させる。	造形活動の楽しみを体験し、大胆に創造し、表現して、美術の学習に対する永続的な興味を生み出す。
	デザイン、応用	デザインと工芸の知識、意義と価値を理解し、デザインと工芸の基本的な手順を知って、方法を学び、身の回りの物事に関心を持ち、問題を発見し、解決する能力を次第に発展させていく。	さまざまな材料の特性を感じて、意図によって材料を選び、適切なツールと制作方法を使用し、基礎的なデザインと制作活動を行う。デザイン、制作の過程を体験し、革新意識と創造能力を発展させる。	観察、発見に敏感で、慎重に計画し、参考にし、緻密に制作する習慣を身につける。また根気よく、団結協力的な工作態度を育成し、デザインと工芸で環境と生活を改善する願望を強化する。
	総合、探求	美術の各学習領域の関係及び美術科と他の教科との関連を理解し、主題により美術と他の教科を融合させる方法を習得し、総合的に問題を解決する能力を強化する。	美術と自然、美術と生活、美術と文化、美術と科学技術との関係を認識し、探究的、総合的な美術活動を行い、また学習成果を多様な形で発表する。	視野と想像の空間を広げ、未知の領域を探索する意欲を激発して、探究の喜びと成功感を体験する。

教育の目標は美術という教科を構成する第一の要素として、目標に対する認知、把握と活用が授業の設計と実施の前提となっている。また、目標の達成度は美術教育に対する評価にも重要な根拠と基準として考えられている。字面的な意味から見れば、創造性の育成を強調するのは主に「造形、表現」、「設計、応用」、「総合、探求」の三つの分野に表れている。例えば、想像力と創造意識を高める，革新意識と創造能力を発展させる，問題を解決する能力を強化するなどである。そうすると、四分の三の教育内容には、創造力向上に関する目標がある。

したがって、教育部（文部科学省）が制定した美術教育の理念と方針から見ると、創造性の育成は美術教育の中で最も重要な内容の一つと考えられている。次では、『美術課程標準（解読）』に基づいて、その中で解読している創造性の育成に関する内容を述べる。

２.『美術課程標準（解読）』における創造性の育成に関する説明

『美術課程標準（解読）』の解説によると、創造性の育成を二つの視点に分けることができる。まずは、現在の小中学校で行っている美術教科が創造性の形成に与える影響。次に、教育方法に一定の措置を採って児童生徒の創造性を育成すること。以下に『美術課程標準（解読）』の解説に基づいて、二つの視点からの内容を述べる。

２－１　現在の小中学校で行っている美術教育が創造性の育成に与える影響

２－１－１　創造的思考の形成

美術教育は創造的思考を育成する最も効果的な教科の一つとして、多くの研究者たちが研究を進めている。創造とは美術の魂であるから、創造性がなければ美術ではないとも言える。また美術作品の価値は、ほとんど独創性によって体現されている。他の教科に比べて、美術教育の自由度は大きくゆったりしている。自由は創造活動の著しい特徴であるが、児童生徒は自分の個性と好みによって、他人とは違った美術作品を作った時、先生に褒められることがよくある。従って、このような絶え間ない奨励によって、児童生徒の創造的思考と行為を強化させ、創造的思考と行為が習慣化する。また、人間は美術活動を推進するため、創造的な問題解決と技術の応用が必要であり、それらの問題解決と技術の応用の過程において、人間の創造的思考が強化される。[2)]

２－１－２　多次元の思考モードを提供する

美術教育は創造性を育成するとともに、その過程において直感が働いている。直感とは、脳の冗長な思考過程を経ずに対象を直接的、迅速、全体的に把握し、探知的な性質を持つ判断である。また、直感的思考は直観性、総合性とイメージの特徴を持っている。これを美術の領域から見れば、直感はいつも私たちが視覚を通して物事に触れる瞬間に起こり、しかもそれは同時的、全体的把握の特徴を持っている。頭の中で視覚を媒介として再現されたものは多次元的、同時的である。人が視覚を媒介として、ある事物の関係を発見し、表現することは利便性がある。例えば、ある事物の関係を図形で表すときに、形、大きさ、色、材質感などの要素によって、明瞭な関係を表現することができる。それに対して、言語で説明するなら、より複雑になる。直感と理性は人間の志向の二つの形式であり、理性の最も典型的な形式は「科学」であり、直感の最も典型的な形式は「芸術」である。だから、美術は直感を訓練する一番よい方法になる。美術教育は、イメージと空間関係の識別と表現方法を訓練することによって、児童生徒が事物との関係を把握する能力を強化することができる。また、児童生徒が具体的な対象から離れ、頭の中で全体的、多次元的関係を想像することもでき、更にそれにより創造的霊感を獲得する。従って、美術を理解し、創造することによって、判断、感情、直感から構成される創造的な思考力を形成することができる。[3)]

２－１－３　創造ための技能を提供する

創造の過程は構想と実施の二つの段階からなり、いくら斬新な思想でも、創造活動を通じて実施することで、成果として物質化することができる。この二つの段階はデザインと工芸の関係と似ている。デザインは構想であり、工芸は構想を完成品にする技術・技能によるものである。また、デザインの段階では、イメージ図やモデルなどを媒介にして表現される、技術・技能の補助も欠かせない。だから、創造的活動における構想の段階も、実施の段階も技術・技能のサポートはどちらも不可欠である。美術教育は構想と実施の両面の能力を共同して発展させるという目的がある。様々な美術の創造活動を通じて、児童生徒は創造活動の実施における共通の部分に対する理解や知識を把握することができる。そして、それらの共通の部分を美術以外の創造活動においても活用することで、もっと速く問題の要点を把握し、適応する能力を備えることが可能である。[4)]

２－２　教育方法や教育的措置をよって児童生徒の創造性を育成する

美術教師の使命は、美術文化の普及と、教育活動による児童生徒の創造的精神と創造能力の育成である。児童生徒の創造的精神と創造能力の育成には、教師の視点で、課程標準では次の４点を提示している。

第１は、児童生徒の個性を守り、個性を発揮させる自由を保障することである。第２に、児童生徒は個性に基づいて大胆に表現し、他人の芸術作品に対して自分の見解を発表するように奨励すべきである。第３は、思考方法においては、創造性に関係する拡散的思考、比較的思考、想像的思考などを考慮することである。そして、創造的思考に有利な環境を形成し、基本的教材によって啓発を促し、児童生徒の創作意欲やインスピレーションを喚起することである。第４に、教育課程の中で具体的なプログラムと方法を設計し、児童生徒の創造的意識と創造能力を育成することである。[5)]

これは『美術課程標準（解読）』における創造性育成の教育方法や教育措置の説明であるが、解説や指導的な内容は少ない。また、方向性や意見はあるが、具体的な実施や操作方法はほとんど示していない。これは綱領的な文書であり、特に創造性の育成に対する内容であるため、内容が具体的すぎると、教師と児童生

徒の創造性を制限する可能性があるからである。また地域により教師と児童生徒はそれぞれの特徴を持っているので、このような解説は各地域に対して考慮しなければならない。従って、この創造性教育の方法や教育措置をもっと具体的に説明するためには、美術の教材を分析する必要がある。

３．美術教材と創造性の育成

３－１　教材の作成について

現在の中国の美術教育において、教材に関する文献はほとんど教材の作成に集中しており、教材と創造性教育との関連はほとんど見られない。また、美術教材の定義について『美術教育学新編』では、以下のように説明している。

美術教材は美術教育の中で重要な部分であり、その役割は課程標準の抽象的な要求を教育課程の実施に結び付けるものである。教材は美術課程標準における各種の知識を網羅する媒介の総称として理解され、美術教育の内容の具体化であり、教師と児童生徒が美術教育活動を行う仲介である。[6] したがって、美術の授業で児童生徒の創造性を育成するため、それに対応する美術教材が不可欠である。教材は教科書に限らず、参考書、映像資料、補助道具などはすべて含まれる。しかし、教科書は教材の中で最も主要なものであり、代表的なものである。

次には美術教科書における創造性教育に関連する要素を検討する。

現在の美術教育の理念では、児童生徒が教育と教材によって培われた能力の変化を重視している。その一つは、1988年から「一綱多冊」の政策が実施されていることである。「一綱多冊」とは、同じ教育要綱の下で、複数の教科書があると言うことである。従って、地域によって特色があり、教材の作成にも違いがある。また、2001年に発表された『基礎教育課程改革綱要（試行）』では、「国家、地方、学校の三級式教育管理を実施し、教育の地方、学校及び児童生徒に対する適応性を強化する。」[7] という理念を提出した。それによって教師に教材開発の権限を与えて、教材や教育手段を地方、学校により特色を発展することができるようになった。

したがって、教材はただのテーマ、ヒント、リソースまたは範例だけで、教師と生徒のために選択可能、開発可能、創造可能な機会を提供するものとなり、さらに広義に解釈したり、探索したり、研究したりすることができるようになった。このような開放的、活性的美術教材は様々な土壌（地域と学校）に根ざし、各教師の創造により「多様性」を生み出し、そして児童生徒の創造を拡大し「無限」を引き出すことができる可能性がうまれた。[8]

ところで、一定の開放性を持った教材や教育課程は、確かに教師や児童生徒に一定の自由な創造の空間を提供することができるが、弊害も見られる。教育課程が教師の創造性を発揮するために設計されている場合、教師自身の創造力の良し悪しは美術教育の中身に大きな影響を与える。そして教育課程の設計に残された自由空間が大きいほど、教師個人の創造性の高低による影響も大きいという関係になる。

筆者の認識からすると、教材の創造性の開発に対する影響は、教師からのものは弱いと考えられる。中国では教師の能力がまちまちなので、教材の内容を分析する方がもっと客観的であると考えられる。筆者の一人、楊が居住する江蘇省は、経済が強く、教育水準も上位にある。そこで、以下に江蘇省で適用されている義務教育段階の教科書を対象として、教材に対する考えと理解を述べる。

３－２　教科書の分析

ここで採り上げる美術教科書は、江蘇省少年児童出版社が2014年に出版し、2018年に第５刷になっているものである。１学年に２冊あり、九年で全18冊ある。美術教育の内容は「造形、表現」、「デザイン、応用」、「鑑賞、評論」、「総合、探求」の四つの分野に分けられている。中学校の教科書では分野が明確に区別されているが、小学校の教科書には分野は区別されていない。これは教科書の著者が教師と児童生徒の想像力を制限しないように配慮したと考えられる。そして、中学校では美術に対する重要度が低く、七、八年生は毎週一回しか授業がなく、九年生は二週間一回で美術の授業となっている。教材の雰囲気も小学校の教材とは異なり、文字の説明が紙面の半分を占め、図版もほとんど芸術家の作品である。しかも小学校の教科書の中のラベルもなくなった。ラベルとは、小さなタイトルと１〜２のキーワードを含むものである。種類はいろいろあり、通常は児童生徒に質問やアドバイスを与えて、啓発をする役割を持っている。通常、１

ページには2〜3のラベルが含まれている。授業の内容を分けて、分類する機能もある。ここでは、中学校の教材は創造性の開発に関する教材として、関連性が低いので本稿では検討しない。

次に、小学校の教科書の内容における図版の注以外に、すべての文字部分はそれぞれ小さいキャラクターとラベルを持っている。そして、そのラベルの色とタイトルによって内容が分類されている。例えば、図1の二年生の教科書の中の「老人と子供」の題材では、この2ページの全体は4つの部分に分けられている。左上の一番大きなエリアは「児童美術館」というタイトルで、内容は主に各種の表現手法で作られた児童生徒の作品である。右上コーナーのタイトルは「博物館に行く」で、博物館にある作品を展示している。また「博物館で老人と子供のイメージを見つけましたか？」と言う質問がある。左下のタイトルは「芸術家を訪問する」で、古代と現代の芸術家が絵画や彫刻で表現した老人と子供の姿を展示している。最後に右下のエリアで使われているタイトルは「生活の中のデザイン」であり、ここでは生活の中で見られる子供と老人をテーマとしてデザインされたものを展示している。例えば図書の表紙、子供のマーク、子供に似ているランプなどである。

図 1　小学校二年生の教材例

そして、エリアの中には「学習アドバイス」があり、内容は三点ある。「老人と子供の外見、動作、表情の違いを観察する」、「老人と子供の動作、表情と調子を模倣する」、また「老人と子供が一緒にいる時の面白いシーンを描いたり作ったりする」である。

この5つのラベルの中の4つは作品の解説である。「老人と子供」というテーマについて、絵画、彫刻、陶芸、手工芸、デザインなどあらゆる美術の表現手段を示すことである。著者はこのような多様な表現を通じて、児童生徒の発散的思考を啓発したいという意図があり、また、児童生徒たちは様々な表現手法を使って美術の創作を行うことができるように望んでいる。つまり作品の形式よりもテーマによって多様な作品を制作することを奨励している。

そのために、「学習アドバイス」という啓発をするラベルで、児童生徒が観察と模倣を通して、表現したい対象をより深く理解することを促している。児童生徒は創作対象に対して、もっと客観的に理解すると、作品の中に自分の主観的な理解を導入することができる。更に、新たな表現手法や特色のある作品を創造す

ることが可能となる。

これら18種類のラベルを整理したものが表２である。

表２　ラベルの種類

分類	ラベルの名称	役割
展示類	生活の中のデザイン	生活の中のあらゆる種類のデザイン作品や製品を展示する
	博物館に入る	博物館にある作品を展示する
	児童美術館	子供の面白い作品を展示する
	芸術家を訪問する	芸術家の作品を展示する
	民芸場に入る	伝統的、民族的、または地区により特色のある作品の展示
	千の世界	世界に存在する珍しいものの展示
	挑戦台	この授業を通じて、完成できる作品の展示
	手先も器用だ	児童生徒の装飾的な手作り作品の展示
	大自然に入る	大自然の中で記録されている面白い写真を展示する
	奇想天外	創造性のある作品の展示
知識類	知識の窓	芸術に関するだけでなく知識の解説
	先を争って答える	自然科学に関する質問
指導類	小妙案	美術に関する技術を教える
	同級生の話	同級生の制作過程の共有
啓発類	学習アドバイス	作者からの質問、指導やアドバイス
	先生の話	大胆な仮説に基づく質問
	当ててみて	多くの答えを持つ簡単な問題
	弁論コーナー	正解のない主観的な問題

表２の内容から見ると、啓発類と展示類の内容が一番多い。著者は一番多い紙面で各種類の題材、作品や表現手段を示して、児童生徒の視野を広げて、拡散的思考、比較的思考、想像的思考を引き出そうとする意図が見られる。そして、二番目に多い啓発類の内容を通して、文字や図で児童生徒の創造性の啓発を意図している。これは前文の課程標準における教育方法に要求された「創造的思考に有利な環境を形成し、基本的教材によって啓発を促し、児童生徒の創作意欲やインスピレーションを喚起するよう努力すべきである」と言う内容に対応している。

創造性の開発に対して、美術教科書を分析する文献や論文は皆無なので、以上の分析は筆者の主観的な判断によるものである。同じ教材に対しても、教師によって違った理解と運用があると考えられる。また、どのような教材でも、教師が工夫や改善をして、様々な児童生徒に適応する必要があると考えられる。

尹少淳は『美術教育学新編』において、美術教科書は美術の知識を掲載するだけではなく、教師と児童生徒の交流の場であり、教師と児童生徒の共通の「話題」であるべきであると述べている。従って、美術の教科書は「既製服」ではなく、「布地」であるべきである。美術教師は児童生徒の「体型」に応じて柔軟に裁断できて、自分の教えた児童生徒にぴったり合うようにすることができるとしている。[9] だから、良い教科書でも良い教師が活用してこそ、その最大の役割が発揮できると考えられる。

次は、中国の研究者が『美術課程標準』に基づいて公表した創造性教育に対する論文を挙げ、創造性の育成に対する方法や手段を検討する。

４.『美術課程標準』に基づいた研究者の創造性教育に対する論述

『美術課程標準』の内容から、教育部は美術教育における創造性の育成を重視していることがわかるが、多くの研究者の報告によると、現実には義務教育段階の美術教育はまだ予想通りの状態ではないとのことである。ここでは主に現在のインターネットの中国知網（CNKI）の登録文献に基づいて、黄佳隽、馬珂、田甜などの研究者が発表した『美術課程標準』における創造性教育に関する文献を紹介し、現在の中国義務教育

段階の美術教育における創造性の育成方法及び発展方向を考察する。

各研究者が使うタイトルや視点は異なっているが、その内容においては共通点が見られる。例えば、創造性を育成するための環境づくり、児童生徒の興味を高めること、思考方法の訓練、評価方法の改善などである。また、筆者は個人的な観点で、前述の研究者たちが言及する共通の観点、また筆者が気付いた部分を整理して具体的な内容を以下に述べる。

４－１　児童生徒の美術への興味を高める

児童生徒に新奇な発想を起こさせて創造性を育成するためには、美術の学習に対して興味を持たせることが不可欠である。例えば、ある児童生徒が、演技意欲が強いなら、鑑賞の時、彼に鑑賞画面の中の話を再現させる。また科学技術館や博物館のような知識が豊富なところに興味を持っている児童生徒がいれば、時間を割いて体験学習に連れて行くことである。[10)]

４－２　名画鑑賞を通じて児童生徒の観察力と創作能力を高める

美術教育には名画の薫陶が不可欠であり、名画の鑑賞は児童生徒の審美能力を高めるだけでなく、児童生徒の表現方法も豊かにすることができる。小学校の児童は様々な考えを持っているが、具体的ではなく、また、考えを表現する手段が少ない。それ故に彼らの考えの表現が阻害され、創作に対する興味も失われる。児童生徒が名画を観察する過程で、作者が創作の過程で出会った問題を考えさせる。例えば、描くものについて、どのように表現するか、構図はどうするか？次に教師は名画の鑑賞を通して、絵の中の作者の問題解決の方法を分析し、児童生徒の視野を広げる。これは児童生徒の審美能力を高めるだけでなく、作品の質を向上させることにも役立つ。[11)]

４－３　発散的思考の訓練を行う

発散的思考とは、問題を解決する時に様々な角度や方法と思考から答えを探す過程であり、出てきた答えは何十種類あるいは数百種類の場合もある。発散的思考は児童生徒の創造力、創造性を育てる基礎として、創造的思考能力を高めるために重要な役割を果たしている。美術教育において「発散的思考」の教育を実現するために、馬珂は以下の三つの要点を指摘している。

第一に、教師は児童生徒を主体として、児童生徒に対する啓発と奨励を重視し、事物に対する思考と観察を促す。これに基づいて、児童生徒の視野を広げる。第二に、授業の中で児童生徒間の交流を促進させ、自分の意見を述べさせ、ブレーンストーミングを行って、児童生徒の考えを前向きにして、広くさせる。第三に、美術創作の過程で、教師は伝統的な創作の視点と思想を打ち破ることに留意する。例えば、絵の幅や比率を変えて、全体と部分の関係を処理して、ツールに対して機能を変化させたり、あるいは更に多くの新しいツールを使ったりして創作を行う。[12)]

「発散的思考」の訓練について具体的な実施方法は、研究者の田甜は三つの提案を述べている。

まずは、簡単な形で児童生徒の発散的思考を導くこと。例えば、授業の中で、教師は円、三角形などの簡単な幾何形、またはいくつかの幾何形の組み合わせた形を児童生徒に示す。そして、この形を基にして、児童生徒に共通の特徴のある一連の物を連想させ、具体化させる。[13)]

また、具体的なイメージで児童生徒の発散的思考を導くこと。例えば、教師は児童生徒に生活の中の実物や写真を観察させて、これに基づいて他の何か関係がある実物や想像物を連想させることである。これにより、児童生徒に生活に対する認識と体得を深めさせる。更に、このような訓練を通じて、児童生徒の絵画の内容を豊かにすることもできる。従って、教師は児童生徒の興味をますます熟知して、彼らの心理的特徴に適した教材を選んで、児童生徒を啓発することができる。[13)]

そして、実物を組み合わせて制作を行い、これにより発散的思考を導くことができる。教師は児童生徒に自由に物を組み合わせさせて、児童生徒の思考を発散させる。例えば、児童生徒に家で各種の廃棄物（新聞紙、缶、紙箱など）を集めて持ってこさせる。これらの廃棄物をそれぞれ四つのテーブルの上に置いて、児童生徒も四つのグループに分けて、班長を選出し、「グループ内の皆でテーブルの材料を使って建物や彫刻を作ることができるか？」という問題を討論させる。その後、児童生徒たちは建築や彫刻をデザインして、制作を始める。児童生徒は皆自分の考えや意見を出して、交流し、作品を改善することができる。このような訓練は、児童生徒の発散的思考に役立つ。[13)]

４－４　教育方法を充実させ、技法と感情の表現を結合させる

美術教育は単に技法を重視するだけではないし、児童生徒の感情の表現を重視すぎてもいけない。芸術創造は作者の感情と技能の両方に基づいて発生されるものである。模写の練習を導入することは、児童生徒の絵画技能に役に立つ。児童生徒は模範画を模写する上で、模範画の内容を改造し、自分の感情や創造的思考を込めることができる。このような、半分模写、半分創造の練習により、児童生徒の絵画技能を練習すると同時に、感情の表現も行なっている。従って、いろいろな模写を通して、児童生徒の見聞を広げて、感情の表現や創造的思考を高める。つまり、小学校の美術教育において、このような半模写、半創作の方法を使って、児童生徒に美術の技能の学習を得させて、また児童生徒の発散的思考も育成することができると、黄佳隽は述べている。[14)]

４－５　児童生徒の創造性を育成するための授業の環境を構築する

授業の環境づくりについて、田甜は次のように述べている。教師は様々な教育内容、教育任務、教育条件によって、授業の環境を構築しなければならない、生き生きとした教育の方法を選んで、教師の言語、授業の評価にも創造性を持つようにすることも重要である。そうすることで、児童生徒たちの美術に対する主体性と積極性を引き出すことができる。更に児童生徒は思考を好み、創造が好きな習慣が形成される。児童生徒の創造力は生まれつきのものであるから、教師は授業の中で民主的、自由的な雰囲気を作ることに力を入れて、児童生徒がゆったりした環境で学習することが大事なことである。このような自由な雰囲気は彼らの創造力の発揮に役立つと考えられる。[15)]

４－６　個人に合わせた教育を行い、児童生徒の個性を重視する

また田は個性について次のように述べている。教師は児童生徒の能力、素質に応じて様々な教育を実施し、それぞれの個性や現実の状況に対して指導することは、彼らの創造性を開発する要点である。義務教育の段階は児童生徒の思考と認識活動は活発であり、彼らは新しいものを受け入れる能力が大である。しかし、児童生徒はそれぞれ、年齢、性格、経験、教養、生活環境、技術などの特徴があり、個人差が大きい。このことは児童生徒の思考方法と創作方法に多様性と複雑さをもたらしてしている。そのため、教師は現実の状況によって、それぞれの児童生徒の要求に応じて教育を行う必要がある。そのような児童生徒の個性に合わせた教育は、彼らの技能の向上と潜在能力の開発に役立つと考えられる。[16)]

４－７　評価方法を更新する

評価は美術活動の重要な一環として、美術教育も例外ではない。しかし、児童生徒の創造性に対する評価はまだ確立していない。教師は自分の主観的な判断で児童生徒の作品に創造性があるかどうかを評価することがあるが、この児童生徒が創造性を持っているかどうかを評価するのは難しいことである。児童生徒の創造性を評価するには、いろいろな要素を考慮する必要がある。それは想像以上に複雑であるが、将来的には研究しなければならない内容である。それについて、黄佳隽は以下の三つの要素を提案している。

評価の方法はそれぞれ素質、知力、性格の異なる児童生徒に適応し、包容力が必要である。全ての児童生徒に成功の喜びと誇りを十分に感じさせ、学習の自信と自覚を確立させることが評価の役割である。[17)]

次に、児童生徒の探求と創造の精神を励まして、個性の伸長を重視する。教師は評価を一つの観点だけではなく、評価方法を変えて、絵画技術の上手な児童生徒に対しては構図や色彩などの視点から奨励し評価する。また技術が上手ではない児童生徒には想像力、創造性などの視点から良い点を見つける。そうすると、児童生徒は技能と技法を練習する時に、もっと自信を持って、自分の考えを大胆に実践することができる。そうした過程で、児童生徒は自分の潜在能力を発見し、創造性を向上させることができる。[18)]

更に、教師は児童生徒に肯定と奨励をするだけではなく、欠点も指摘し、それを説明する必要がある。児童生徒は自分の長所と問題点を正確に認識するならば、それ以後の作品の質を向上することができる。このような評価を通じて、美術教育の効果を高め、児童生徒の創造性の育成することができると考えられる。[19)]

おわりに

現在、創造性の育成は世界中で重要な話題となり、研究者に注目されている。美術教育は創造性の育成の

有効な教科の一つとして、中国では研究価値が高いと考えられている。小学校の段階では児童の思考は最も柔軟で、創造性を育成するには適切な段階であると考えられている。しかし、創造性教育の展開は容易ではない。教育過程においては様々な未知の要素が存在し、児童の反応、教師の対応、さらには結果に対する評価の不確実性などの問題がある。これまで創造性の定義にはいくつかの理論が存在しているので、一つの授業を通じて、児童生徒の創造性が向上したかどうかの判断については、絶対的に正しい答えはないと考えられる。したがって、現在の中国の研究者たちは、創造性育成の過程を重視している。先述の研究者の理論をまとめると、現在の中国の美術教育における創造性の育成に対する理論、方法及び今後の発展方向を以下のように総括することができる。

まずは、美術教育の視点からみれば、児童生徒が美術の興味を高めることは不可欠である。これは美術教育を媒介として創造性を育成する前提である。教師は教育の方法、教師の言語、授業の評価にも創造性を持つことが望ましい。そのことで、児童生徒の学習に対する主体性と積極性を引き出すことができる。更に児童生徒に考えることを好きにさせ、創造活動を好きにする習慣を身に付けることが望ましい。

また、名画の鑑賞を通じて児童生徒の審美能力を高め、視野を広げ、児童生徒の表現方法を豊かにすることも必要である。技法の訓練については、半模写、半創作の方法によって、児童生徒に美術の技術、技能の学習を修得させることで、発散的思考も育成することができる。そして、創造性の開発に対する手段として、授業の中で発散的思考の訓練を重視する。この発散的思考の訓練の過程で、教師が児童生徒の「フラッシュポイント（ひらめきの瞬間）」を把握し、児童生徒に創造性を十分に発揮させ、創造性と芸術的素養を形成させるように促す。更に、彼らの潜在能力を発掘し、積極的に評価をし、大胆に創造活動を奨励する。

最後に、これからの研究内容として、創造性教育の評価システムを構築する。教師と児童生徒の間の評価を通じて、彼らは自分の長所と問題点を正確的に認識し、次の作品の質を向上する。これにより、美術教育の効果を高め、児童生徒の創造性の育成のために基礎を備えることができると考えられる。

以上のように、現在の中国の美術教育では、創造性の育成を重視している。これは「革新」という言葉で流布している。最初はデザインの分野から始まり、経済の国際競争に対応して、デザインの一新が促進された、それは、日本の1960年代の高度経済成長の始まりと類似している。本来、美術教育は表現活動と鑑賞活動によってなされており、そこには創造や想像の活動が含まれている。表現においては発想力、技術、技能の育成が要因となり、鑑賞においては、理解力、想像力の育成が要因となっている。また、表現活動においては、心象表現と目的表現があり、人間の内発的想像から自己表現に至るものと、現実の生活や社会における問題の発見による問題解決による目的表現に至るものがある。どちらの表現活動においても根底には「創造的活動」を含んでいる。このように美術教育による創造性の育成は、美術教育の教材と教育方法の全てに関連している美術教育の目的の一つである。さらには美術教育で修得された創造性が美術とは離れた分野においても、観点、方法、直観による関係づけ、着想から発想への広がりなどにより、有効に働く能力となる。それゆえに、美術教育による創造性の育成は義務教育段階では教育目的の重要な要因となっている。

参考文献

(1) 中華人民共和国と教育部：『義務教育美術課程標準（2011年版）』，北京師範大学出版社.

(2) 教育部基礎教育課程教材専門家工作委員会：『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』，北京師範大学出版社.

(3) 尹少淳：『美術教育学新編』，高等教育出版社，2013.

(4) 教育部：『基礎教育課程改革綱要（試行）』に関する通知、教育部サイト，2001年6月8〈http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/jcj_kcjcgh/200106/t20010608_167343.html〉

(5) 兪傑：中学校美術教育における創造力の育成に対する研究，天水師範学院，2015.

(6) 黄佳隽：小学校美術教育における創造力育成の教育策を探究する―南昌市青山湖区小学校を例に，江西師範大学，2018.

(7) 馬珂：中学校美術デザイン課程と創造的思考能力の育成，陝西師範大学，2018.

(8) 田甜：小学校美術教育の中で学生の創造力の育成に対する研究，山東師範大学，2012.

引用文献

1）中華人民共和国と教育部：『義務教育美術課程標準（2011年版）』，北京師範大学出版社，p3.
2）教育部基礎教育課程教材専門家工作委員会：『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』，北京師範大学出版社，p74.
3）教育部基礎教育課程教材専門家工作委員会：『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』，北京師範大学出版社，p75.
4）教育部基礎教育課程教材専門家工作委員会：『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』，北京師範大学出版社，p75～76.
5）教育部基礎教育課程教材専門家工作委員会：『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』，北京師範大学出版社，p76.
6）尹少淳：『美術教育学新編』，高等教育出版社，p198，2013.
7）教育部：『基礎教育課程改革綱要（試行）』に関する通知，教育部サイト，2001年6月8
〈http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/jcj_kcjcgh/200106/t20010608_167343.html〉
8）教育部基礎教育課程教材専門家工作委員会：『義務教育美術課程標準（2011年版）解読』，北京師範大学出版社，p182.
9）尹少淳：『美術教育学新編』，高等教育出版社，p201，2013.
10）兪傑：中学校美術教育における創造力の育成に対する研究，天水師範学院，P26，2015.
11）黄佳隽：小学校美術教育における創造力育成の教育策を探究する―南昌市青山湖区小学校を例に，江西師範大学，p27，2018.
12）馬珂：中学校美術デザイン課程と創造的思考能力の育成，陝西師範大学，p31～32，2018.
13）田甜：小学校美術教育の中で学生の創造力の育成に対する研究，山東師範大学，P21～22，2012.
14）黄佳隽：小学校美術教育における創造力育成の教育策を探究する―南昌市青山湖区小学校を例に，江西師範大学，p28，2018.
15）田甜：小学校美術教育の中で学生の創造力の育成に対する研究，山東師範大学，P24～25，2012.
16）田甜：小学校美術教育の中で学生の創造力の育成に対する研究，山東師範大学，P23，2012.
17）黄佳隽：小学校美術教育における創造力育成の教育策を探究する―南昌市青山湖区小学校を例に，江西師範大学，p29，2018.
18）同上
19）同上

付記

本研究は文部科学省科学研究費補助によるものである。佐々木宰代表「アジアにおける美術教育による創造性開発とその実質化に関する研究」（2020－2023、研究種目：基盤研究（C)、課題番号 ：20K02784）。